校長室だより～燦燦～ №３２９

心に残る作品

2021.3.22

まもなく今年度、令和２年度が幕を閉じようとしている。２０２０年は、後世の人たちが間違いなく世界史的な分水嶺だったと評価するであろう年になったと言える。何と言ってもコロナ禍が全人類を瞬時に巻き込むという人類史初と言ってもいいほどの出来事が起こった。そして、それは私たちの価値観や社会システム、国際情勢など、あらゆるものに大変な衝撃を与えた。

この１年を振り返って、自分は日々の仕事において、何を残してきたのだろうかと考えた。すると、つい先日、「日々の仕事が残すもの」という文章に出会った。以下に紹介する。

我々は、日々の仕事において、何を残しているのだろうか。そのことを考えさせられるささやかな体験があります。

何年か前、あるタクシーに乗ったときのこと。そのタクシーの運転手の方は、目的地に着いて料金を受け取るとき、こちらの目を見つめ、真心を込めて、「有り難うございました」とおっしゃったのです。

そのとき、その乗り心地の良い運転と、気配り溢れる応対とともに、その運転手の方の「仕事」に対する思いが、深く伝わってきました。

この方は、日々の顧客サービスというものを、単なる「商品」として、提供しているのではない。この方は、それを、自身の「作品」として、心を込めて残されている。その思いが、伝わってきたのです。

たしかに、それは、「形に残らないサービス」でした。しかし、それは、まぎれもなく、「心に残る作品」でした。

ますます考え込んでしまった。自分は、日々の仕事に対して、どれほどの思いを込めてきただろうか。誠心誠意、心を込めてきたと言えるだろうか。もっとできた、もっとこうすればよかったという思いが募っていく。

長年にわたり、教員を続けてきた。自分が行ってきた毎年毎年の教育活動を一つの作品としたら、今年の作品の出来はどうだったのか。今までの作品と比べてどうなのか。とても展示できるような作品とはならなかった。自責の念に駆られる。

そもそも、まともな作品と呼べるような年があったのか。実は一つも無いのではないか。教育は未完のプロジェクトとはいえ、教育に携わっている以上は、毎年作品を仕上げなければならないはずである。

教育の多くは形には残らない。生徒の心に残るかどうかである。生徒が、これからどんな生き方をしていくかである。そう考えると、毎年毎年の作品は、随分と後になってから完成するとも言える。これからも、一日一日、真心を込めた仕事をしていこうと思う。